

# 近代化研究 (第2報)

「近代化」概念規定の試み

高橋 善二郎

The Study of Modernization

— Trial provision of a conception “Modernization” —

Zenjiro TAKAHASHI

It is very difficult to explain the term “modernization” in one word. The word “modernization” will be historical category. We have many essential words when we explain “modernization”—like “progress”, “democratization”, “rationalization”, “industrialization”. But each words are not enough to explain the real meaning of modernization. The author emphasize to pick up the rationalization. But this rationalization will reject to take some points of view from capitalism and socialism.

## 第2章 「近代化」を「進歩」と規定する見解と私見

E. O. ライシャワー氏は、次のように述べている。「『近代』とか、『近代化』とかいうことばには、一般的に受け入れられている定義はありませんが、わたしは過去一、二世紀の間に出現した複雑な社会のことをいっているのです。それは最初に西欧世界に現われ、またこの日本にも現われた社会です。この種の社会には、多くのはっきりした特徴があります。一つは、この社会で科学的知識を通して進歩の観念を利用すること、すなわち科学的計画に基づく計画的改革を通じて、以前存在していたものよりよいものをつくり出すという明白な観念です。こうした態度は、大部分の前近代社会に見られる過去の黄金時代の維持もしくは回復の強調とは対照的です。…科学的に計画された進歩の道を遠く進んでいるという意味において、あるいは機械の利用による人力の増大という点で、世界のすべての国が現在近代化しているわけではありません。事実上すべての社会が現在進歩の観念を持っていますが、一部の社会はこの観念を使いこなすにはまだ困難を覚え、多くの社会は、世界の一部の地域において、人間の能力をとほうもなく増大させている生活の機械化の多くを実現するにはほど遠いのです。」<sup>1)</sup>

ライシャワー氏は、「近代化」を技術的進歩に密着させて、進歩の理念の称揚のうちに、これに伴う変化のすべてを、歴史的発展の姿として肯定しようとする立場をとっている。

渡辺洋三氏は、民主主義の原理と進歩の関係を次のように述べている。

「ここで歴史的な観点を導入して、近代化を一般にブルジョア民主主義の諸原理が実現される過

程としてつかまえるなら、日本の近代化においては、ブルジョア化と民主化とが分離したことが特色であるといえることができる。およそ『近代』が、歴史的に進歩的であるというためには、ブルジョア民主主義の『民主主義』的側面に注目しなければならない。たとい、その民主主義の担い手がブルジョアジーであり、その原理にブルジョアの制限がつけられているとしても、民主主義原理そのものは、うたがいもなく進歩的な役割を担っている。それゆえ、近代化において『ブルジョア化』と『民主主義化』とが手をたずさえてすすむとき、かかるものとしての近代化の進歩性はとまり、ついには反民主主義化を伴うに至って、反動的なものへ転化してゆく。』<sup>2)</sup>

渡辺氏は、ブルジョア化の一定の進展が、民主主義化を伴わなくなるとき、近代化の進歩性はとまり、といて、「近代化」それ自体を進歩とは規定していないのであるが、「近代化」に「進歩性」をみているわけである。

このように、「近代化」と「進歩」を結びつけて考える論は他にも多く挙げられる。上述のライシャワー氏と渡辺氏のいう「進歩」と「進歩性」とでは、その意味するところが異なるが、果して「社会の進歩」とはどのようなことであろうか。

知識の進歩は、本来人間が外界の事柄を支配するための行動の手段であり、事柄に対する力の増強のためのものであったといえる。ところで、これが個人から離れ、技術的な手段の拡大となって人類の集団的な進歩となる。このような知識の進歩による近代文明は、近代社会において人類にどのような影響をあたえたであろうか。科学知識・技術の進歩は原子力で大量の殺戮をひきおこしたが、戦争はいつの時代にもあったのであり、不治とされた病気が治療されるようにもなったのであると、「近代化」の功績を説くとしても、巨視的にみて、われわれの生活を向上させたであろうか。

近代の進歩主義は、理性の要求として人間関係の改善を求めたのである。そこに基本的人権がさげられ、民主主義の旗が掲げられたのである。それは精神の進歩を目指したものである。ところで民主主義の時代となり、大衆と機械的技術が文化に入りこみ、社会の卑俗性が人々を支配しはじめた事実は見おとせない。大衆の文化とは、文化が大衆の線まで下って大衆の要求を満足させることではない。人々の内心にひそむ精神を客観的に表現することであった。しかし、大衆が要求し、社会が要請したものは、高度の精神文化ではなく、技術文明であった。ギリシア文化が民衆的であったと同時に高度であったのは、社会が有機的であったからである。われわれが唱えてきた有機的社会秩序は、ただ技術によって組織化された統一の要望にすぎなかった。十八世紀には、自我を確立した個人が、自己の欲するところに従って活動することによって、社会成員全体の福祉が増進すると考えられていた。それは、社会成員全体の中に社会が存在していたからである。それに反して、十九世紀には、社会はその成員に関係なく成立していた。人々は環境とのバランスを失い、有機的秩序は求めうべくもなかった。

ライシャワー氏は、日本の近代化を助長した要因に、「文字の読み書き能力が高度に普及しており、教育に対する強い一般的な意欲があった」<sup>3)</sup>ことを指摘している。たしかに、教育の普及、大衆の読み書き能力の高い普及率（進歩）が近代化によってもたらされたかもしれないが、大衆が政治的実権を握るにつれて、文化に含まれる高度の要素が失われ、質の低下のもたらされた点もみおとせないことである。

### 第3章 「近代化」を「民主化」と規定する見解と私見

中山伊知郎氏は、「近代化」と「民主化」の関係を、次のように述べている。「近代化というときには、ときとして制度的な改革だけが注目されることがありますが、生活的な側面を忘れてはなり

ません。また近代化というときには、物的、経済的な側面だけが注目されるくらいがありますが、精神的・文化的な側面も同様に注目されるべきです。この意味において、近代化のほんとうの問題は、工業化や民主化が、伝統的社会に及ぼす影響の中にあるといってもよいでしょう。工業化や民主化に対する伝統的社会からの反応の中に、近代化の速度と内容とがきめられていくからです。』<sup>4)</sup>

中山氏は、近代化の特徴として工業化（第5章）を指摘しながら、工業化のばあいと同じように合理的精神を基礎としてあらわれる「民主化」を、近代化のもう一つの特徴として指摘している。

近代化を「民主化」という視点からとらえて、経営面の改善を強調するのは尾高邦雄氏である。すなわち、体制従属の範囲での民主化を一層促進することが、近代化であり、労務・人事問題に即して、労使関係・雇用政策の近代化をはかる、という主張である<sup>5)</sup>。

いわば、わが国の経営の特質を、人対人の関係における近代化のたち遅れという点に求め、それを克服することをもって近代化の課題となし、その集中的な課題として雇用政策の民主化に焦点をしばっている。氏の近代化の概念は、それを経営の民主化に求めている点では、進歩的な見解といえよう。しかし、わが国の現段階での近代化という課題は、内容はさらに複雑多岐であり、たんに近代化のたち遅れをとり戻すという点にのみ止まるものではないと思う。

渡辺洋三氏は、最近わが国の近代化を高く評価する見解が多く発表されているが、それらの見解は、近代化をブルジョア化という視点から捉えた見解にすぎず、もし、近代化を民主化という視点で見るとすれば、全く結論は逆になる、として次のように述べている。「日本の近代化においては、明治のときから、ブルジョア化と民主化とはむすびつかず、むしろ民主化を抑圧しつつブルジョア化がすすめられたといえるであろう。国家法の設定した近代化のわくとは、実は、このような意味でのブルジョア化であった。ブルジョア化が民主主義原理とむすびつかず、逆に反民主的な天皇制原理とむすびついて展開したのが、ほかならぬ日本の近代化といわれる現象である。それゆえ、このブルジョア化の現象に注目するなら、日本は戦前においてさえ近代化がすすんだ国との評価をうける。しかし逆にその反民主化の現象に注目するなら、日本は近代化のおくれた国との評価をうけることをさげられない。」「戦後日本の近代化過程において、当初の一時期は、ブルジョア民主主義のうちの民主主義的側面が強調されていたのに対し、次第にその側面は姿を消し形がい化し、かわってブルジョア的側面が強く前面に押出されるに至っている。これが国家法＝権力の設定した近代化の路線である。」「ここでは近代的なものを、民主的なもの、したがってまた進歩的なものとしてとらえ、それを前近代的なものに対比するという考えかたについての再検討をうながせば足りる。農地改革のもたらしたものは、農村の近代化ではあるが民主化ではなかった。家族制度の解体のもたらしたものは家族関係の近代化ではあっても民主化ではない。労働諸立法のもたらしたものは、労働関係の近代化ではあっても民主化ではない、等々である。そして、今日、近代化がすすむにつれて、ブルジョア合理主義者ではあるが必ずしも民主主義者ではないというタイプの人間がますます増大しつつある。そして、今後の政治過程において前近代的封建的反民主主義者より、近代的合理的反民主主義者が、今後ますます重要な役割を担うこととなるであろう。』<sup>6)</sup>

渡辺氏の主張されるように、近代化は民主化を伴わなければならないのであれば、日本の近代化は、民主化を伴わないいき形のものであった。しかし、近代化をブルジョア民主主義の諸原理が実現される過程として捉えるならば、民主化を伴わないブルジョア化の事実をも近代化として認めないわけにはいかない。

ところで、民主化をもって近代化の規定としようとするとき、プロレタリア民主主義の取扱いが次の問題となる。しかし、このプロレタリア民主主義を近代化にくみ入れると、当然、絶対主義天

皇制やナチス・ドイツのもとでの近代化も同時に問われることになる。このことについて、次のような見解を述べることもできよう。すなわち、われわれは理念として民主主義的市民社会を考へるのである。実際は、そのような社会は近似のものしか存在しないのである。人民主権といっても、実際は主権はブルジョア階級にあり、人民の自由や権利も、実は法津上だけのものであって、近代化は不完全な形で進んできたものである。したがって、絶対主義天皇制やナチス・ドイツにおける近代化を認めてもさしつかえない、と。しかし、この場合重要なことは、民主主義をただ単に政治上の原理としてだけでなく、社会生活上の原理として捉えなければならない、ということである。その意味では絶対主義天皇制もナチス・ドイツにも、民主主義を認めるわけにはいかない。

井上清氏は、これに関して次のような説をとる。「民主主義にはブルジョア民主主義もあればプロレタリア民主主義もある。両者には決定的なちがひがあるので、そのちがひを無視して、工業化一般や民主主義一般を想定して、これを『近代化』とすることは、歴史と現実の理解および評価に重大なあやまりと混乱をもちこむことになる。」<sup>7)</sup>氏は、ブルジョア民主主義とプロレタリア民主主義とに決定的な違いを認め、両者を明確に区分する立場をとっている。

#### 第4章 「近代化」を「合理化」と規定する見解と私見

築島謙三氏は、「近代化」を「合理主義」と規定して次のように述べている。「人間平等と自由の精神が近代の特質であるともいわれるが、平等といい自由というのは、不平等と拘束とが不合理なものとしていわば本能的ともいえる反撥心をひき起こしてくるそのことと表裏をなすように、人間が親しく乞い求める根源的な目標である。つまり不合理を嫌い、合理を要求するのが人間には根源的なものとしてあって、その要求を叶えてくれる時代を称して近代というのである。その要求を政治・社会・法律・経済その他あらゆる面で満たしていない時代が近代以前である。ひとくちにおいて合理的精神が社会の大勢をリードしている時代が近代である。近代という時代をそのように規定することができるが、そのような特質を個人および社会が身につけることを称して個人の近代化および社会の近代化というのである。」<sup>8)</sup>

寺尾琢磨氏も次のように述べている。「近代化がなんらかの形における社会的進歩を意味していることは疑えないが、それが社会生活における人間の意識についてなのか、技術についてなのか、制度についてなのか、等々について人の解釈はまちまちである。しかし安んじていえることは、すべての場合の共通の特徴として、合理主義あるいは科学主義への接近をあげることができよう。裏がえせば近代化とは、非合理的なもの非科学的なものに対する挑戦のプロセスであって、古くはルネッサンス・啓蒙運動・産業革命などに始まる無知・迷信・教会・専制の打倒から、政治の民主化経済の合理化、技術革新にいたる大きな流れは、いずれも近代化の現われといえよう。」<sup>9)</sup>

西欧近代の合理主義は特徴あるものであり、また個人主義もそうである。近代の特徴を合理主義として、中世の伝統主義と対立させる考え方は、そもそも18世紀における西欧の世界史的状況によるものである。すなわち、それはこれ以前のいかなる時代や他の諸国民における文明の発展とも異なり、その深さや規模においても、発展の速度においても、比較にならないくらいに大きく、かつ急速なものであり、さらに世界史的関連も広汎で深刻であったことによって、西欧における中世の文明との間にすら越え難い断層があるかのようにかれらには感ぜられたのである。そして、西欧人自身が中世を伝統主義、近代を合理主義と規定して対立させる考え方がここに生じたのである。

もっとも18世紀フランス啓蒙思想の合理主義は、人間性の価値を合理性のうちに求め、人間主義を抽象化してしまったとして、ドイツ啓蒙思想では、生の本質の内面的体験が唱えられ、非合理主

義の自己発現的な自由が主張されたように、上の考え方も次第に強い批判の対象とされたことは事実であった。つまり、「合理主義」も、近代市民社会を貫く基準となるかどうかは疑問である。ところが、日本においては、西洋史を解釈する場合に、この二つを対立させて考えることが多い。すなわち、フランス啓蒙思想家に共通するあの国家・宗教・風習の不合理に対する攻撃の思潮は、近代社会を通じて流れているとみる。既成のもの全領域にわたって、理性が容認し難い不合理なものを合理化してゆこうとするとともに、前近代的社会の克服としての近代の一つの特徴を感ずるわけである。

ところで、合理主義は、欧米人たちにとっては、これが世界に共通する原理として成立するものと考えられていた。しかし、欧米文明の日本への輸入においては、この合理主義はほとんど入っていなかったのである。この事実は、日本においては、日本人が封建的・非合理的であって、合理主義を理解しないことに理由を求めていることが多い。この理由によって、日本の近代化の内容が低劣であるとの評価もされている。

近代日本が、その欧米文明をどのように受けとめてきたか、中村勝己氏は次のごとく述べている。「近代日本は鎖国下の洋学者以来の伝統をついで西洋近代文化を物質技術文明として限定し、技術系列の遺産のみをきわめて積極的にかつ急速に受容した。必要な生産技術…経営技術、組織…法律技術…および軍事技術…を驚くべき速度で、文化との全体の関連から切断して導入した。欧米文明は利用すべき素材にすぎなかったのである。このような技術主義的な外来文化受容のあり方が、近代西洋文化の日本の理解の最大の特徴である。……このように精神を技術から切り離す即物的、現実的、世俗的能力ないし智慧があったから、他国もおどろくほどの速さで『産業化』が可能であった。しかし他方では、このような『精神なき』技術主義は…文化的雑居性を随伴することとなった。アニミズム的諸現象を牢固たる礎とし、その上に神道・仏教・儒教・西洋技術が累積する多神併拝型の精神構造…相矛盾する要素を『価値合理化』せずに雑居させうる日本型『寛容』＝無緊張癒着型の精神構造、変革を迫る西洋的・キリスト教的な価値合理性を『非寛容』と観じ、東洋的無・和を以てつつみ、まきかえそうとする日本の精神態度、こういう生産力の主体的条件があったればこそ、一方では諸外国から驚嘆されるほどの経済成長もあった。」<sup>10)</sup>

中村氏は、日本の近代化の質的な特徴に関心をもち、日本の精神構造に普遍的価値を定礎することなしには、日本の近代化は考えられないことを指摘している。中村氏の見解は、アメリカの学者たちが、日本の工業化は日本人の合理性によって有効に処理され、その日本人の合理性が、現在の発展を実現しているのであって、日本人が高い合理性を持っていることを究明することが大切であると主張する見解に等しい<sup>11)</sup>。これらの見解に対しては、合理性という言葉の意味を明確にすることが要求される。また、合理化は、何らかの立場に立っての合理化に支えられているものである。たとえば、経済については、資本主義の立場からの合理化ということが考えられる。一般には、能率という立場からの合理性などがかなり多くの場合指摘される。

#### 参 考 文 献

- 1) E. O. ライシャワー 「日本近代の新しい見方」(講談社・現代新書・昭和40年10月、134、134頁)
- 2) 渡辺洋三 「日本社会の近代化」——法と社会の関係を中心に——(「思想」1963年1月号 126頁)
- 3) E. O. ライシャワー 前掲書 36頁)
- 4) 中山伊知郎 「日本の近代化」(講談社・現代新書 1961年1月 208頁)
- 5) 尾高邦雄 「日本の経営」(中央公論社 昭和40年)
- 6) 渡辺洋三 前掲誌 126～127頁

東京家政大学研究紀要第15集

- 7) 井上 清 「近代化への一つのアプローチ」(「思想」1962年11月号 12頁)
- 8) 槇島謙三 「日本人の近代化」(東洋哲学研究所「東洋学術研究」第5巻第12号 11, 12頁)
- 9) 寺尾琢磨 「近代化と教育」(「日本経済の近代化」東洋経済新報社 昭和42年12月号 167頁)
- 10) 中村勝己 「日本の近代化」(「経済評論」1966年6月号 127~128頁)
- 11) R. N. Bellah, "Tokugawa Religion" 1957 堀一郎, 池田昭共訳「日本近代化と宗教倫理」未来社, 1962年。

註

序 第1章「近代化」を「資本主義の発展」と規定する見解と私見(以上第1報…本紀要第10集) 第2章「近代化」を「進歩」と規定する見解と私見 第3章「近代化」を「民主化」と規定する見解と私見 第4章「近代化」を「合理化」と規定する見解と私見(以上第2・3・4章本集) 第5章「近代化」を「工業化」と規定する見解と私見 第6章「近代化」を「産業化」と規定する見解と私見 結語(以上次集)